

モンゴル通信

NO.10

授業が成り立たない...

小学1～3年生の授業を担当するようになって3ヶ月。これまで行われて来た音楽の授業は、読み書き中心。小学1年生にも音楽のノートがあって、授業の半分は板書だったんです。そのおかげもあって、ほとんどの子どもが歌や表現遊び、ダンスや楽器といった実技中心の授業を笑顔で楽しんでくれることにやりがいを感じていました。

しかし、そう上手くいくわけがなく...。始めは同席してくれていた担任の先生は、しばらくすると自分の仕事をしに教室から姿を消すように。担任がいなくなった途端、子どもたちはニヤリ。すぐに騒がしくなります。

「一人ではできません。教室に来て。」と助けを呼びに

いく私。コソコソと先生のヒールの音が聴こえると姿勢を正す子どもたち。鬼の形相で教室のドアを開け「警察のように私が立っていないと授業を受けられないの?!」と叱る先生。叱られて泣く子どもたち。「私が笑顔で授業をしたものなら、教室は大変なことになるわ。アイはもっと厳しくしなきゃだめよ。」と言われ、モンゴル式叱り方の指導を受ける始末。「ドガイバエ（黙りなさい）」「ヤーガッタカンベ（何してんの!）」などなど。そんな負の連鎖が続いていました。

たった3ヶ月授業を担当しただけでも、子どもたちの変化の面白さや表現力の豊かさに感動し、たまらない可愛らしさを感じていた私は「担任の先生は、子どもたちに興味がないのかなあ」「子どもたちは、叱られる・叩かれる恐怖がないと授業を受けられないのかなあ」と常に考えていました。



動きを付けて歌を歌おう！（みんな前に来ちゃいます）



始めて手にしたリコーダー

想いを伝える

ある日の3年生の授業。開始早々、担任の先生が教室からいなくなりました。表現遊びや歌などの活動中“一番前に来たい”と子どもたちが押し合いへし合い、一瞬でもみくちゃんに。友達を馬鹿にする仕草をする子どもも。お手上げ状態の私に対し、静かに席について“歌いたいよ!”と真っすぐ悲しそうな目を向けてくれる子どもも。

この時の無力感を忘れることはできません。申し訳なく情けなくて。担任の先生を呼びに行ったところ、この日の先生、いつも以上に子どもたちを叱って叩きました。

これまで我慢していた感情がこみ上げて来て、涙をこらえられなくなった私は、先生と子どもたちに想いを伝えることにしました。

先生には「あなたのクラスの子どもたちは、よく歌を歌うし、表現力も素晴らしい。楽器を丁寧に扱ってくれて、飲み込みも早い。以前は歌う時に立ちもしなかった子が、最近は歌い始めている。お願いだから教室にいて、子どもたちの姿を暖かく見守って、私を助けて欲しい。」とお願いしました。先生にお願いしたいことはもっともっとたくさんありましたが、自分たちも同じような教育を受け、他に方法を知らない大人を変えるのは難しい。教室にいてもらって、子どもたちの姿を見てもらえたら!と思い、“そんなに叱らないで”“叩かないで”とは、あえて言いませんでした。

子どもたちには「あなたたちは、歌を大きな声で歌ってくれるし、素晴らしい想像力で表現遊びを楽しんでくれる。楽器を大切に扱ってくれることも嬉しい。すごく可愛らしくて、私はこのクラスで授業するのが大好きだけれど、担任の先生がいなくなると規律がなくなってしまう。私のモンゴル語が不十分で皆にとって分かりにくいことを申し訳なく思っている。でも中には、私のモンゴル語を言い換えて助けてくれる子もいるし、授業を受けたいと静かに座って待っている子もいるよね。私はいつも怖い顔をして歌を教えることはできないし、ケンカをせずに立っていられないからといって、ノートに書かせるばかりの授業もしたくない。授業で、音楽を楽しんで、色々な気持ちを感じて成長して欲しいと思っている。ケンカしたり、友達を馬鹿にしたり、授業を受けたい子の邪魔をするのは許せない。私も自分はどうしたらいいか考える。皆も自分で、自分はどうしたらいいのか考えて。」と伝えました。

こういう場面は、モンゴルに限らず、日本でも同じ。情けないなあと自己嫌悪。まわりの先生に助けを求めていたつもりでも、プライドが邪魔をして一人で何とかしようと抱え込んでいたところがありました。一人でできることなんてほとんどない。弱さを認め、助けを求め、想いや意図を伝えなきゃなあと改めて思うのでした。（富井愛）



鳥のダンス（本当に可愛い）